

『グリム童話集』注釈の試み (1) (KHM 1)

Untersuchungen der Anmerkungen der Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm (1) (Nr. 1)

小 高 康 正

Yasumasa KOTAKA

まえがき

1970年代に入り、グリム研究は、『子供と家庭のメルヒェン集』(Kinder-und Hausmärchen) (以下、『グリム童話集』) だけでなく、グリム兄弟 (Jacob und Wilhelm Grimm) の他の著作も含めて新たな段階に入った。それは L. ブルームの言葉を借りると、「神話的・文化史的なものから文献学的・社会史的なものへのパラダイグマの変換」と言われ¹⁾、その始まりとして、L. デーネッケの『ヤーコプ・グリムと弟ヴィルヘルム』の資料研究が挙げられる²⁾。

特にグリム・メルヒェンの研究においては、この新たな段階は1975年の H. レレケによる『グリム兄弟の最初のメルヒェン』に始まる一連の『グリム童話集』の校訂版によって切り開かれてきた³⁾。

レレケによる研究は文献学的手法による厳密なテキスト校訂のみならず、語り手「若きマリー」の発見にみられるように提供者に関する文学史的、社会史的研究においても画期的な成果を上げている。なかでもグリム兄弟のメルヒェン出所 (Quelle) についての成果は、1980年のレクラム版の『グリム童話集』(1857年決定版、全3巻) に添えられた付録では、KHM各話の出所と、最初のメルヒェンおよび初版から最終版にいたる、その後の各版の変遷について系統だててまとめられている。

グリム兄弟は1812年に『グリム童話集』の初版の第一巻 (86話) と1815年に第二巻 (70話) を出版した時、それぞれの話 (すべてにではないが)

に彼ら自身による注釈をつけていた。このことは『グリム童話集』が本来は子ども向けの読み物というより、学問的なメルヒェン集として意図されていたことを示している。その後、1819年に再版 (第二版) を出す際に子どもの読み物としての「教育的意図」も考慮されることになったのをきっかけにして、注釈部分が切り離されることになった。それに関して弟ヴィルヘルムは第二版の序文で次のように述べている。

「従来、注釈にはわずかなスペースしかありませんでしたが、この本の規模が大きくなったので、第三巻として、独立の注釈書をつくることになりました。これによって、従来の版で心ならずも発表できなかったものを書きくわえられるようになったばかりでなく、そこに必要な事項を新しく書きくわえることが可能になりました。この注釈がこれらの伝承の学問的価値をいっそう明確にするであろうことを、わたしたちはねがっています。」⁴⁾

そして1822年になって第三巻目としてはじめて独立に注釈集が出版された。この注釈集 (第二版) は初版の本文につけられたものに比べ、すべての話に注釈が加えられ、彼らが話を集めた地域名や、他の類話 (話の合成、捜入など) や関連する神話的モチーフを指摘したりして、記述も詳しくなり、分量も大幅に増やされた。その中には、各話についての注釈のみならず、「様々な時代や民族におけるメルヒェンの存在を確証」させてくれる「証言」(Zeugnisse) と彼らが参考にした文献の章も設けられている。

この注釈集はその後も「童話集」と平行して、

各話の類話や新たな情報が加えられ、1857年の『グリム童話集』(第七版)が出される前年の1856年に第三版が出版された。この『グリム童話集』・注釈版』は、グリム兄弟の死後、長い間出版されなかったが、1980年になってハインツ・レレケによって、先のレクラム3巻本に注釈集のファクシミリ版によって復刻され、わたしたちも読むことができるようになった。

その後、ヨハネス・ボルテとゲオルク・ポリーフカの二人が、ヤーコプ・グリムの息子であるヘルマン・グリムの依頼を受けて、1913年から32年にかけて浩瀚な5巻本の『グリム童話注釈集』を編纂した⁵⁾。

このボルテ／ポリーフカの『注釈集』は1856年の『グリム童話集』を土台として、グリム兄弟の集めた話の出所について詳しく調べられていた。またグリム兄弟の集めた類話についても、その延長上に増補的にヨーロッパを中心とする世界中の類話を取り上げている。その広範さと系統性はそれまでに類がないほどであり、今なおグリム・メルヒェン研究のみならず広くメルヒェン研究にとって頼りになる基本的な著作となっている。ところが個々の話の出所(提供した語り手)やグリム兄弟の文献の加工については、その後の研究による新たな検証を必要としていた。

グリム兄弟の注釈研究によって始まり、ボルテ／ポリーフカの『注釈集』へとつながる、メルヒェンの系統的な研究は、ドイツにおいてはその後、大きく二つの流れを形成していった。ひとつはマッケンゼン(F. Mackensen)による『ドイツ・メルヒェン事典』⁶⁾におけるように、『グリム童話集』を中心にドイツ語圏におけるメルヒェンを

考察しようとする方向であり、もう一つはメルヒェンの国際比較の視点から研究しようとするものである。前者は戦争によって<G>の項目までで中断されたままである。後者は、ランケによって創刊された「ファブラ」誌と平行に編纂の始められた『メルヒェン百科事典』⁷⁾にその成果が蓄積されている。現在はゲッティンゲン大学の民俗学研究室において、H. J. ウター(Hans-Jörg Uther)を中心に続けられているが、今世紀中に全巻完成するのは無理だと言われている。

グリム兄弟による注釈はドイツにおけるだけでなく国際的なメルヒェン研究の嚆矢とされるわりには、いまだドイツ語以外に翻訳はなく、これまでグリム童話の成立史をあつかった個々の話の中では触られることはあっても、まとまった形でその内容が取り上げられることはなかった。『グリム童話集』が世界中に訳され、日本でも翻訳が何種類もあることを考えるとき、同じ『グリム童話集』の中の一巻(注釈版)が取り残されていることは、全体像を捉えるうえでは大きな欠落であると思われる。

この研究ノートでは、以上のようなグリム兄弟によるメルヒェン収集と研究から、現在に至るメルヒェン研究の流れをふまえながら、以下、1857年の第7版(決定版)の番号順に、KHM番号とタイトル(ドイツ語、日本語)をつけて、アールネ／トムソンによる話型(AT番号)⁸⁾、グリム兄弟の最初の手稿(1810年)(エーレンベルグ稿)⁹⁾を示した後、グリム兄弟による注釈(1812-1856)¹⁰⁾を中心に、ボルテ／ポリーフカ(1912-1932)¹¹⁾やH. レレケによる出所(原典)の解明と検証¹²⁾を参考にしながら各話を見ていきたいと思う。

KHM1

Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich

「蛙の王様、または鉄のハインリヒ」

AT440¹³⁾

アールネ/トムソン (A. Aarne/S. Thompson) の分類では、〈蛙の王様〉の話は、人間と動物との結婚を主モチーフとする、〈異類婚姻譚〉の中の〈動物嫁〉(Tierbräutigam) に属し、AT440タイプにあげられている。このタイプの話の展開は次のようになっている。

I 蛙との結婚の約束

(a)池の蛙が三姉妹の末娘にきれいな水(あるいは、水の中に落としたボール)を与える(b)引き換えに蛙と結婚するよう娘に約束をさせる

II 蛙の訪問

(a)娘は蛙との約束を忘れるが、蛙が玄関に現われ、入れてくれるよう頼む(b)それから蛙は玄関、テーブルの上、最後にはベッドの中で眠る

III 魔法が解ける

(a)娘のベッドで眠ることを許されることによって(b)口づけによって(c)首を切られることによって(d)壁にぶつけられることによってあるいは(e)蛙皮を焼くことによって、蛙の魔法が解け、王子になる

IV 鉄のヘンリー

王子の忠実な家来は、胸が張り裂けないように、三本の鉄の輪を付けている。彼の主人が助け出されると、その輪が一本ずつはじける

第25番「王女と魔法にかけられた王子。蛙の王様」¹⁴⁾

王様の一番下のお姫様は森に出かけ、涼しい泉に腰を下ろしました。そうしてお姫様は金のまりを取りだし、遊びましたが、突然まりは泉の中に転がりました。お姫様はまりが深く落ちていくのをながめ、泉のそばに立って悲しい気持ちになりました。すると突然、蛙が水の中から顔を出し、「なぜそんなに悲しんでいるの」と尋ねました。「あら、失礼な蛙さん、あなたにわたしを助けることなんかできないわ。わたしの金のまりが泉

の中に落ちたのよ」とお姫様は答えました。すると蛙は言いました。「もしおまえが僕と一緒に家につれて帰るなら、おまえの金のまりを取ってきてやろう」。お姫様がそれを約束すると、蛙は潜り、すぐにまりを口にくわえて上がってきました。そしてまりを外に放り投げました。お姫様は急いでまりを取り戻すと、急いで立ち去り、蛙が約束どおり一緒に連れていってくれるように叫んでも、聞こうともしませんでした。お姫様は家に帰り、王様と食卓にすわって、食べようとすると、扉を叩く音がして、「一番末のお姫様、扉をあけてください。」という声が聞こえました。お姫様は急いで行き、そこで見たものは、あの醜い蛙でした。彼女は急いでまた扉を閉めました。しかし、父親の王様は誰がいたのか尋ねました。そしてお姫様はすべてのことを話しました。すると再び、叫ぶ声がしました。

一番末のお姫様

扉を開けてください

忘れたのですか きのう

あなたがわたしに言ったことを

あの涼しい泉のそばで

一番末のお姫様

扉を開けてください

それで王様はお姫様に蛙のために扉を開けるように言いつけました。すると蛙はびよんと跳んで入ってきました。それから蛙は彼女に言いました。僕をお皿のそばにおいて下さい、あなたと一緒に食べたいのだから。彼女はそうしたくありませんでしたが、王様がやはりそうするように言いつけました。それで蛙はお姫様の横に座り、一緒に食べました。それからお腹がいっぱいになると、お姫様のベッドに運んでほしい、あなたのそばで寝たいからと言いました。しかしお姫様はそんなことは絶対にしたくありませんでした。というのは彼女は冷たい蛙がとても怖かったからです。しかし王様は今度もそうするように言いつけました。彼女は蛙をもって、部屋に連れていくと、怒りでいっぱいになり、蛙をつかむとおもいきりベッドの壁に向けて投げつけました。しかし蛙は壁にあたるや否やベッドに落ちると若くて

美しい王子となって、横たわっていました。それでお姫様は彼のところに横になりました。

朝になると、王子の忠実な家来がひくすばらしい馬車がやってきました。彼は王子が姿を変えたのを痛く悲しんで、胸の回りに三本の鉄の輪を巻き付けねばなりませんでした。それから王子とお姫様が馬車に乗り込むと、忠実な家来は(馬車の)後ろに立ち、王子の国に向かって出かけようとなりました。すると少し進んだかと思うと、王子は後ろで何かはじける音を聞きました。それで大声で言いました。

ハインリヒ、馬車がこわれたぞ！
 いいえ、ご主人様、馬車ではありません
 あなたが蛙になって
 泉のそばで座っていたとき
 大きな苦痛のために巻いていた
 わたしの胸の輪です

口伝え

H. レレケによると、この手稿(1810年)の25番目はヴィルヘルムの手によって、カッセルのヴィルト家からの口承を記録したものとされている。この話は初版(第一巻、1812年)以来ずっと第一巻におかれ、『グリム童話集』の巻頭を飾っている。

グリム兄弟による初版の注釈では、まだ話の出所を示す地名は書かれていなかったが、1822年の第二版からは「ヘッセンから」とのみ記されるようになった。1856年の注釈¹⁵⁾(以下、年号の記載をしない場合は1856年の第三版の注釈を指す)に入れられた第二巻13番の「蛙の王子」は次のような話である。

13 蛙の王子

三人の娘を持つ王がいました。彼は病気で彼の中庭にある泉の水を欲しがりました。一番上の娘が降りていき、コップ一杯の水を汲もうとしました。しかしそれをお日様にかざして見ると、濁っていました。奇妙に思い、もう一度泉の水を汲もうとしました。すると泉の中で蛙が動き、頭を水面に出し、ついには泉の縁に飛び上がってきて、

話しかけてきました。

『もし僕の恋人になってくれるなら
 澄んで、きれいな水をあげるよ
 しかし、もし恋人にならないなら
 ピチャ、ピチャ水を濁らせるよ』

『あら、誰がいやらしい蛙の恋人になるものですか』と言って、そのお姫様は立ち去りました。上にあがってくると、妹に泉に座って、水を濁す不思議な蛙のことを話しました。そこで二番目のお姫様が降りていき、コップ一杯の水を汲みましたが、それでも濁っていたので飲めるものではありませんでした。そこで蛙は再び泉の縁に座って言いました。

『もし僕の恋人になってくれるなら
 澄んで、きれいな水をあげるよ』

『それが私の好都合ならね!』と言ってそのお姫様は立ち去りました。最後に三番目のお姫様も水を汲みに来ましたが、うまく行きませんでした。すると蛙が彼女にも言いました、

『もし僕の恋人になってくれるなら
 澄んで、きれいな水をあげるよ』

『ええ、いいわ恋人になってあげるわ』と彼女はにっこりして答えました。『だから私に人の飲めるきれいな水をちょうだい』しかし彼女はこう考えました。『どうってことないわ、彼の気に入るようにそう言うなんて簡単よ。だって馬鹿な蛙が私の恋人にはなれないわ』

蛙はしかし再び水の中に飛び込みました。彼女が二度目に汲むと、水は澄んでいて、その中でお日さまがほんとうに喜んで光っているほどでした。彼女はたっぷり飲むと、姉たちにも持ってきました。「お姉さんたちはなんて単純なんでしょう、蛙を怖がるなんて。」

そのあとお姫様はそのことをそれ以上考えずに、日が暮れると満足して横になりました。しばらく横になりましたが、眠られずにいると、突然戸のところを何かか這う音がして、そのあと歌う声が聞こえました。

戸を開けておくれ、戸を開けておくれ
 一番末のお姫様

泉に座っていたとき、
僕がきれいな水をあげると、
恋人になってくれると言ったのを
覚えていないのですか？

「ああ、そこにいるのはわたしの恋人の蛙さん」と、お姫様は言いました。「わたしは彼に約束をしたのだから、開けてあげましょう。」彼女は立ち上がり、戸を少し開けると、再び横になった。蛙は彼女の後についてピョンと跳ね、ベッドの彼女の足元までやってくると、そこにじっとしました。夜が明けると、蛙は再び跳び降りて、戸の方へ行き去っていきました。次の日の晩、お姫様がまた寝ようとする、また何かか這ってきて、戸のところで歌いました。お姫様が戸を開けてやり、蛙は夜が明け始めるまで、彼女の足元にうずくまりました。三日目の晩も前日のようにやってきた。「あなたに戸を開けてあげるのはこれが最後よ」「これからはもうだめよ」とお姫様は言いました。すると蛙は彼女の枕元に跳び上がり、お姫様は眠りました。朝、目が覚め、蛙は出ていったかしらと思っていると、美しくて若い王子が目の前に立っており、自分は魔法にかけられた王子で、お姫様が彼の恋人になる約束をしてくれたので魔法が解けたと言いました。そこで二人は王様のところへ行くと、王は二人を祝福し、それから結婚式があげられました。二人の姉たちは自分たちが蛙を恋人にしなかったことに腹を立てました。」

この話は、1813年3月18日にカッセルで、マリー・ハッセンブルーク (Marie Hassenpflug) によって口頭で伝えられていた。

さらに、グリム兄弟が三番目の話として紹介している、バーダーボルンの話は次のようなものである。これはカッセルから少し離れたベーケンドルフ (Bökendorf) のハクストハウゼン家 (Familie von Haxthausen) の寄与による。

「蛙の姿から魔法を解かれた王子は彼の妻との別れに際して、一枚の布を渡す。そこには彼の名前が赤く書かれており、もし彼が死んだり、心変わりがあったときには黒くなるというものであった。あるとき花嫁は残念なことに、そ

の名前がほんとうに黒くなったのを見た。そこで花嫁は二人の姉妹とともに騎士に変装して王子を探しに出かけ、王子のところで雇われる。ところが彼女たちは疑惑を持たれ、エンドウ足をまかれる、というのはもし彼らが豆の上で滑り、女であれば驚くだろし、もし男であれば、罵るだろうというわけである。しかし彼女たちはそのたくらみを聞いていたので、豆の上で滑ったとき、彼女たちは罵りの声をあげた。その後王子は偽物の花嫁と一緒に旅立つと、彼女たち三人も王子の馬車の後を追った。途中で王子は何か大きなはじける音を聞き、「止まれ、車がこわれたぞ」と叫んだ。すると本物の花嫁が馬車の後ろから「いいえ、ちがいます、それは私の胸の輪が一本外れたのです。」と答えた。さらに二度、三度王子は同じ答えを聞く。それで王子は本物の花嫁のことに気づき、騎士の姿をした花嫁を見分けて、結婚式をあげる。」

これらの類話を紹介した後で、グリム兄弟は、この話が「ドイツで最も古い話の一つ」であり、悲しみに満ちた胸に鉄の輪を巻いた忠実な家来にちなんで、「鉄のハインリヒ」という名前で呼ばれている、と書いている。そしてゲオルク・ロレンハーゲンの「ドイツの古い家庭のメルヒェン」という証言を挙げている。これはH. レレケによれば、ロレンハーゲンが1595年に出した『鼠の鳴き声をする蛙』 (Froschmeuseler (hrsg. von K. Goedeke, Leipzig 1876, S. XXVI) に書かれていた「不思議な、家庭のメルヒェンで、書かれたものではなく、いつも口頭で子孫に伝えられた」などとして、「鉄のハインリヒ」の物語と呼んでおり、ロレンハーゲンはある章のタイトルに「蛙の王様」(I, 1.2)の名前も挙げているのである¹⁶⁾。

この注釈の記述から、グリム兄弟がなぜこの「蛙の王様」の話を彼らのメルヒェン集の巻頭においたのか。またなぜこの話には「蛙の王様」と「鉄のハインリヒ」というように、タイトルが二つになっているのかの理由が推測されよう¹⁷⁾。

グリム兄弟は特に「胸に巻いた鉄の輪」に注目していた。そして「ミンネの詩人」やハインリヒ・フォン・ザックス、ハインリヒ獅子王などの歌

を指摘している。

この話がドイツだけでなく、ヨーロッパにおいても古いことをグリム兄弟は指摘している。その例として、スコットランドで1548年に書かれた「スコットランドの不平」の中の『世界の果ての井戸』の話を紹介している。

「一般に知られている話によれば、ある娘が継母にこの世の果てにある井戸から水を汲んで来るように遣わされる。多くの危険な目にあいながら、その井戸に着く。しかしすぐに彼女はまた冒険が終わっていないことに気づく。蛙が井戸から姿を現わし、水を汲むのを許す前に、彼女に結婚を迫る。約束を破れば、ばらばらに引き裂くと脅かす。娘は無事に家に戻るが、真夜中、蛙が玄關に現われ、結婚の約束のため、中に入れるよう求めて、娘と乳母を非常に驚ろかせた。

戸を開けておくれ、愛しいひとよ
戸を開けておくれ、愛しいひとよ
そして泉のそばの草地に座って
わたしとあなたが話した言葉を思い出しておくれ

蛙は中に入れてもらおうと、彼女に申し出た。

あなたの膝の上に乗せておくれ、愛しいひとよ
あなたの膝の上に乗せておくれ、愛しいひとよ
そして泉のそばの草地に座って
わたしとあなたが話した言葉を思い出しておくれ

最後に、蛙の魔法が解け、王子はもとの姿に戻る。」

その他、初版での注釈ではフランスのドーノワ夫人の「有益な(良い)蛙」に言及し、「よくない話である。わたしたちの話とはぜんぜん似たところがない」と批判していたが、このドーノワ夫人の話は『妖精文庫』(Cabinet des fees, Paris 1785)に再掲されたものであった。1822年の注釈

からはこの記述は省かれた。

この話を提供したヴィルト家 (Familie Wild) はカッセルで「太陽軒」という薬局を経営していた。薬剤師のルドルフ・ヴィルト (Rudolf Wild) とその妻ドロテア (Dorothea Catharina) との間には6人の娘がおり、1805年以来、グリム兄弟らの隣人であった。2番「猫とねずみのとも暮らし」と3番「マリアの子ども」を提供したのは次女のグレートヒェン (Gretchen) であったが、この一番の話はヴィルト家の誰によるものかは特定されていない。

謝辞

この研究ノートの記事は、1994年度長野大学在外研究員制度によって、1994年10月より1995年3月までドイツ、ヴッパータール大学 H. レレケ教授の指導のもとで行なわれた研究成果の一部であることを記し、お世話になったすべての方々から感謝いたします。

(こたか やすまさ 教授)
(1995. 7. 6 受理)

注

- 1) Lothar Bluhm, "Neuer Streit um die >Alte Marie<?", in: *Wirkendes Wort* 39 (1989), H. 2, S. 181.
- 2) Ludwig Denecke, *Jacob Grimm und sein Bruder Wilhelm*. Stuttgart 1971.
- 3) *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der Handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812*. Hrsg. von Heinz Rölleke. Cologne-Genève 1975.) (以下、Rölleke, *Älteste Slg.* と略す)
Kinder- und Hausmärchen: Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. hrsg., von Heinz Rölleke. 3 Bde. Stuttgart (Philipp Reclam) 1980. „Nachweis“, Bd. 3, S. 441-543. (以上、Rölleke, „Nachweis“ と略す。)
- 4) *Ibid.*, Bd. 1, S. 21. (訳、小沢俊夫『完訳グリム童話Ⅱ』(479~480ページ))
- 5) Bolte, Johannes/Polivka, Georg: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. Bd. 1-5. Leipzig 1913~32. Neudr. Hildesheim 1963). (以下、BPI-V と略す)
- 6) *Handwörterbuch des deutschen Märchens*, Hrsg. von Lutz Mackensen. Bd. 1 Berlin/Leipzig 1930

- 33. Bd. 2. Berlin 1934-40.
- 7) *Enzyklopädie des Märchens. Handwörterbuch zur historischen und vergleichenden Erzählforschung.* Hrsg. von Kurt Ranke [u. a.]. Berlin/New York 1975 ff.
- 8) Anti Aarne/Stith Thompson: *The Types of the Folk-Tale.* Helsinki⁸ 1961. (FFC 184.) (以下、AaTh と略す。)
- 9) 注3)
- 10) 初版につけられた注釈: Heinz Rölleke, *Kinder- und Hausmärchen.* Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815. Göttingen 1986.) (以下、Grimm (1812/1815) と略す。) 注釈集第二版: KHM. Vollständige Ausgabe auf Grundlage der dritten Auflage (1837), hrsg. von Heinz Rölleke, Frankfurt a. M. 1985 (Ersatzweise aus 1856) S. 863-1147. (以下、Grimm (1822) と略す。) 注釈集第三版: Kommen-
- tierte Neuausgabe zusamt dem Faksimile des Anmerkungsbandes von 1856, hrsg. von Heinz Rölleke, Stuttgart 1980. (以下、Grimm (1856) と略す。)
- 11) BPI-V.
- 12) 注3) および、„Einzelkommentar“, in: Vollständige Ausgabe auf Grundlage der dritten Auflage (1837), hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt a. M. 1985, S. 1190-1285. „Erläuterung“, in: Rölleke, *Älteste Slg.*, S. 341-398. を参照。
- 13) AaTh, S. 149f.
- 14) Rölleke, *Älteste Slg.*, S. 144-153.
- 15) Grimm (1856), S. 3-7.
- 16) Rölleke, *Nachweis.*, S. 442.
- 17) 拙稿「グリムの『蛙の王様』におけるハインリヒのエピソード」(関西大学「独逸文学」第36号(平成4年6月)22-41ページ)参照。